

容所があったのだ。「さようなら！」今度こそ本当に日本に帰れるのだ、十五歳で家を出、満州、そしてシベリアと長かったいろいろなことを思い浮かべると、涙が出てくる。六月十七日、故郷の柏崎駅におりたが、両親は亡くなっており、家も人の手に渡っており、なかった。

シベリア抑留記

大阪府 竹山 竹次郎

我々の中隊は日ソ開戦より八月十五日の終戦も知らず、ソ連軍と後方にさがりながら交戦していましたが、八月二十六日の朝六時ごろ、隊長の命令で日本が負けたと知らされ終戦となりました。そのときは残念でした。それから武装解除され、海林に集結して九月中旬、二千人単位で当時の満州を一か月近くも毎日々々朝早くから夜遅くまでソ連兵の監視で北端のソ連領に着き、野原の一角に中隊ごとテントを張って何日かおりました。

その着いた日に、これから寒くなるからといって中隊

で綿の入った満服を支給され、もらうなりみんな着てその足で五人で近くに積んであった乾草をまきのかわりに取りに行きましたところ、一人の人が馬車に乗ってきて、私どもをたたき、それに腰をけったりして、私どもが着ている満服まで取り上げて帰ろうとするのです。満服がなければ夏の服一枚だけですから、満服を取り返そうと思って馬車に飛び乗り満服を取り戻しましたが、最後には私を乾草を集めるホークで私を突くようにしましたので、これ大変だと思って満服を取ることができず馬車の走っているときに飛びおりました。

こんなことがありましたと中隊に帰って言いましたら、もうかわりもないからハダカでおれとかわりをもらえることなく苦労しました。

それから何日か、ある日汽車に乗せられ出発しました。私は日本へ帰れるものと思っていました。が汽車は北へ北へと行くのです。何日かたって着いたところは北の北の果てタイセット地区のネブルスカヤ捕虜収容所に入られ、それからは毎日強制労働させられ、仕事の内容は、鉄道建設、伐採、道路建設、れんが工場、木材工場

等他にいろいろな作業の毎日でした。収容所の生活は悲慘なものでしたが毎日続きました。

毎日強制労働させながら食事は黒パン百五十グラムくらい、ご飯のときはコジラシでした。雨が降って着物が多少ぬれても着替えがないので、そのまま着なければなりませんのです。

冬になってきますと大変です。マイナス五十度から七十度くらいはあるのです。夕方おそく仕事から帰って夜寝るのですが、私の横で朝仕事に行くぞと起こしたら、戦友が冷たくなって死んでおられたことがあります。

私個人は夜昼なく当時小便に十五、六回行くので、言われ得ぬ苦勞をしました。シベリア抑留中飢えと寒さに困って、生きんがためソ連兵の個人の家に仕事に行ったときなど、残飯置き場が便所のそばにありましたが、拾って食べたこともあります。

また自分が食べたコウリヤンは体内で消化しませんとそのまま大便となって出るので、それをまた拾って洗っていただいたこともあります。私がおりましたタイセツト地区ネブルスカヤ収容所の付近は、農作物はなく

松の木と白カバの木ばかりです。

冬のごく寒い五十度―七十度もあるのに、やぶれた着物、やぶれた靴、靴下一枚、冬の寒さをしのぐためポロきれを拾って靴下のかわりにしておりました。かつまた、私個人、日本のためになりませんが、私の性分からどんな仕事に行っても人一倍働きました。その苦しい重労働で私は五十八キロから四十二キロまで体が弱っていましたが、幸い九死に一生を得て、祖国日本へ昭和十二年十月二十七日、舞鶴港へ帰ることができました。最後に、八月八日開戦より終戦も知らず、知ったのは八月二十七日でした。私個人はその間ようやりました。八月二十七日、旧満州、横道河子が終戦でした。私の戦争体験は言うに言われぬものがあります。

私のシベリア抑留四年間

静岡県 内山 隆

私は昭和十九年四月十日、三島第九部隊に入隊直ちに